マツゲン 4大会ぶりV

【マツゲン箕島―エフコムBC】優勝しマウンドで抱き合って喜ぶマツゲン箕島の選手たち＝猪飼健史撮影

社会人野球の第48回全日本クラブ選手権大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）は最終日の3日、栃木県足利市のジェットブラックフラワーズスタジアムで決勝があり、マツゲン箕島（和歌山）がエフコムBC（福島）に9―1で七回コールド勝ちし、第44回大会（2019年）以来、4大会ぶり6回目の優勝を果たした。マツゲン箕島は今秋に行われる日本選手権の出場権を得た。出場は4大会ぶり7回目。

マツゲン箕島は二回に冨田泰生の適時打で先制し、三回は竹中夢翔の2点二塁打などで3点、四回も3点を加えた。投げては先発の川畑大地が5回1失点と好投し、その後は小刻みな継投で相手の反撃を封じた。エフコムBCは創部初の決勝進出を果たしたが、打線が3安打に封じられた。

最終日は準決勝と決勝を実施した。

表彰選手は次の通り。

最高殊勲選手賞＝奥田貫太投手（マツゲン箕島）▽敢闘賞＝渡辺拓海投手（エフコムBC）▽首位打者賞＝中山聡外野手（マツゲン箕島、16打数8安打、打率5割）

▽準決勝

ショウワコーポレーション（岡山）　0000200002
エフコムBC（福島）　2100000003X

（シ）橋本、橋爪―江口（エ）渡辺拓、大内、長根―高野▽本塁打　八百板飛（エ）

大和高田クラブ（奈良）　0000000000
マツゲン箕島（和歌山）　1100400006X

（大）西、松林、畑中―安岡、三藤（マ）奥田、坂本―藤田幸

▽決勝

マツゲン箕島　0133000219（七回コールド）
エフコムBC　0000100100

（マ）川畑、森山、山元、森、坂本―藤田幸（エ）佐藤一、長根、小川―高野、武藤（マツゲン箕島は4大会ぶり6回目）

ミレニアム打線 爆発

過去5回V経験の伝統 2000年代生まれぞろい

過去5回の優勝を誇るマツゲン箕島だが、選手全員が26歳以下で、多くが2000年代生まれ。前回優勝した19年のメンバーはいない。そんなフレッシュな打線がつながり、6回目の歓喜の輪を作った。

序盤から攻めた。二回、敵失で得た1死二塁の好機に00年生まれの2年目、冨田泰生は「甘い球なら初球から」と決めていた。狙い通り、初球の外寄りの直球を引っ張り左前に運び、先制適時打とした。試合前、西川忠宏監督が「先制できるかがポイント」と話していた理想の展開に持ち込むと、三、四回には長短打に犠打も絡めて3点ずつ加え、終始、打線で圧倒した。

21、23年は全国大会に出場したが、いずれも準々決勝敗退。打線が振るわず辛酸をなめた。01年生まれの4番・竹中夢翔は「個人個人が結果を求め過ぎてしまっていた」と話す。その反省から昨年の大会後、役割を明確化した。上位は出塁、中軸は走者を還し、下位は上位に良い形でつなぐ。打撃練習でも常に意識したことで打線のつながりが生まれた。

決勝の三、四回に適時打を放って3打点を挙げた竹中は「（優勝は）チームとして攻撃ができた結果」と手応えを口にする。準決勝の強豪・大和高田クラブ戦も6点を奪って快勝した。

今大会は4試合で失点はわずか3と、守りからリズムを作る持ち味も健在だ。新たに加わった強力打線を引っ提げ、京セラドーム大阪へ乗り込む。【牧野大輔】